

木の子説法

泉鏡花

青空文庫

「——鱧^{はも}あみだ^{ぶつ}仏、はも仏と唱うれば、鮒^{ふな}らく世界に生れ、鮒^{こち}へ鮒^{こち}へと請^{しやう}ぜられ……仏と雑^{ざこ}魚して居べし。されば……干鯛^{ひだい}貝^いらしいし、真経^{まきやう}には、蛸^{たこ}とくあのく鱧^{たら}——」

……時節柄^{ときせつがら}を弁^わえるが^まいい。蕎麦^{そば}は二銭^{にせん}さが^つても、このせち辛^{から}さは、明日^{あした}の糧^{かて}を思^{おも}つて、真面目^{まじめ}にお念^{ねん}仏^{ぶつ}でも唱^なえるなら格別^{かくべつ}、「蛸^{たこ}とくあのく鱧^{たら}。」などと愚^{おろ}にも^もつかない駄^だ洒落^{しやれ}を弄^もぶ、と、こごとが^あ出^でそうであるが、本篇^{ほんぺん}に必要^{ひつやう}で、酔^よにするように切離^{きりはな}せないのだから、しばらく御海容^{ごかいよう}を願^{ねが}いたい。

「……干鯛^{かんだい}かいらいし……ええと、蛸^{たこ}とくあのく鱧^{たら}、三百三^{さんびやくさん}もん^{もん}に買^かうて、鰻^{ぶり}菩薩^{ぼさつ}に参^{まゐ}らする——ですか。とほけていて、ちよつと愛^{あい}嬌^{きやう}のある^ある^るものです。ほんの一番^{いちばん}だけ、あつきあい下^{くだ}さいませんか。」

こう、つれに誘^いわれて、それからの話^わである。「蛸^{たこ}とくあのくたら。」しかり、これだけ^{だけ}に對^{たい}しても、三百三^{さんびやくさん}もん^{もん}が^がほ^ほどの価^ね値^ちを^をお認^{ねん}めにな^なつて、口惜^{くやし}い事^{こと}は^はある^ある^るまいと思^{おも}う。

つれは、毛利^{もうり}一^{いち}樹^{じゆ}、とい^いう画^え工^かさん^{さん}で、多^た分^{ぶん}、挿^{そう}画^が家^か協^{きやう}会^{かい}員^{いん}の中^{なか}に、芳^{つら}名^なが^が列^らつてい^いようと思^{おも}う。私^{わたし}は、当^{とう}日^{じつ}、小^{しょう}作^{さく}の挿^さ画^がのた^ために、場^ば所^{じよ}の实^{じつ}写^{しゃ}を詠^{あつ}えるの^のに同^{どう}行^{ぎやう}して、麻^あ布^ふ我^が善^{ぜん}坊^{ぼう}から、狸^{まみ}穴^{あな}辺^{あな}——化^くけるの^のかと、す^すぐまたお^おな^なか^かま^まから苦^く情^{じやう}が^が出^でそうであ

る。が、憚りながらそうではない。我ながらちよつとしおらしいほどに思う。かつて少年の頃、師家の玄関番をしていた折から、美しいその令夫人のおともをして、某子爵家の、前記のあたりの別荘に、栗を拾いに来た。拾う栗だから申すまでもなく毬のままが多い。別荘番の貸してくれた鎌で、山がかりに出来た庭裏の、まあ、谷間で。御存じでもあろうが、あれは爪先で刺々を軽く圧えて、柄を手許へ引いて搔く。……不器用でも、これは書生の方がうまかった。令夫人は、駒下駄で圧えても転げるから、褌をすんなりと、白い足袋はだし、それでも、がさがさと針を揺り、齒を剥いて匆ねるから、憎らしい……と足袋もとつて、雪を錬りものにしたような素足で、裳をしなやかに、毬栗を挟んでも、ただすんなりとして、露に褌もこぼれなかった。——この趣を写すのに、画工さんに同行を願ったのである。これだと、どうも、そのまま浮世絵に任せたがよさそうに思われない事もない。が、そうすると、さもしいようだが、作者の方が飯にならぬ。ソツとして置く。もつとも三十年も以前の思出である。もとより別荘などは影もなくなった。が、狸穴、我善坊の辺だけに、引潮のあとの海松に似て、樹林は土地の隅々に残っている。餅屋が構図を飲込んで、スケッチブックを懐に納めたから、ざつと用済みの処、そちこち日暮だ。……大和田は程遠し、ちと驕りになる……見得を云うまい、これがいい、これがいい。長

坂の更科さらしなで。我が一樹も可なり飲ける、二人で四五本傾けた。

時は盂蘭盆うらぼんにかかつて、下町では草市が立っていよう。もののあわれどころより、雲を搔裂きたいほど蒸暑かつたが、何年にも通つた事のない、十番でも切ろうかと、曾我ではなけれど気が合つて歩行き出した。坂を下りて、一度ぐつと低くなる窪地くぼちで、途中街燈の光が途絶えて、鯨が寝たような黒い道があつた。鳥居坂の崖下がけしたから、日ヶ窪ひの辺らしい。一ひと所、板塀の曲角に、白い蝙蝠こうもりが拈ひつたように、比羅びらが一枚貼はつてあつた。一樹が立留たまつて、繁つた檜かしの陰に、表町の淡い燈ひにすかしながら、その「——干鯛かかいらいし——……蛸たことくあのくたら——」を言つたのである。

「魚説法うおせつぽう、というのです——狂言があるんですね。時間もよし、この横へ入つた処らしゆうございますから。」

すぐ角を曲るように、樹の枝も指せば、おぼろげな番組の末に箭やの標示がしてあつた。古典な能の狂言も、社会に、尖端せんたんの簇やじりを飛ばすらしい。けれども、五十歩にたりぬ向うの辻の柳も射ない。のみならず、矢竹の墨が、ほたたと太く、蓑みのの毛を羽にはいだような形を見ると、古俳諧にいわゆる——狸おとを威おどす篠張しのはりの弓である。

これもまた……面白い。

「おともしましよう、望む処です。」

気競きおつて言うまで、私はいいい心持に酔よっていた。

「通りがかりのものです。……臨時に見物をしたいと存じますのですが。」

「望む所でございます。」

と、式台正面を横に、卓テエブル子を控えた、受附世話方の四十年配の男の、紋附の帷かたびら子で、舞まい袴ばかまを穿はいたのが、さも歓迎の意を表するらしく気競きおつて言った。これは私たちのように、酒気さけけがあつたのでは決してない。

切符は五十銭である。第一、順と見えて、六十を越えたらう、白髪しらがのお媼ばあさんが下足げたを預るのに、二人分に、洋杖ステッキと蝙蝠傘を添えて、これが無料で、蝦蟇がまぐち口ひねを捻ひねつた一樹の心づけに、手も触れない。

この世話方の、おん袴はかまに対しても、——（たかが半円だ、ご免を被かつて大きく出ておけ。——）——軽少過ぎる。卓テエブル子を並べて、謡本少々と、扇子が並べてあつたから、ほんの松の葉の寸志と見え、一樹が宝生雲の空色なのを譲りうけて、その一本を私に渡し、

「いかが。」

「これも望む処です。」

つい私は莞爾にっこりした。扇子店おうぎみせの真上の鴨居かもいに、当夜の番組だいじが大字だいじで出ている。私が一わたり読み取つたのは、唯今ただいまの堀下ほりしたではない、ここでの事である。合せて五番。中に能の仕舞もまじつて、序からざつと覚えてはいるが——狸の口上らしくなるから一々は記すまい。必要なだけを言おう。

必要なのは——魚説法——に続く三番目に、一、茸ひとつきのこ、（くさびら。）——鶯さぎ、玄庵——の曲である。

道の事はよくは知らない。しかし鶯の姿は、近ごろ狂言の流ながれに影は映らぬと聞いている。古い隠居か。むかしものの物ものずき好で、稽古けいこを積んだ巧者が居て、その人たち、言わば素人の催しであろうも知れない。狸穴近所には相応ふさわしい。が、私のいうのは流儀の事ではない。曲である。

この、茸——

慌あわただしいまでに、一樹が狂言を見ようとしたのも、他ほかのどの番組でもなく、ただこれあるがためであろう、と思う仔細しさいがある。あたかも一樹が、扇子のせめを切りながら、片手の指のさきで軽く乳のあたりと思う胸をさすつて、返す指で、左の目をおき压えたのを見るにつ

けても。……

一樹を知ったほどのもので、画工えかきさんの、この癖を認めないものはなからう。ちよいと内証で、人に知らせないように遣るや、この早業はやわざは、しかしながら、礼拝と、愛撫と、謙譲と、しかも自恃ほこりをかね、色を沈静にし、目を清澄にして、胸に、一種深き人格を秘したる、珠玉しゆを偲しのばせる表ひょうげん頭でであつた。

こういううちにも、舞台——舞台は二階らしい。——一間四面の堂の施主が、売僧まいすの魚説法を憤つて、

「おのれ何としようぞ——」

「打たば打たしめ、棒ぼう鱈たらか太刀魚たちうおでうちあれ——」

「おのれ、また打ちやうちやく擲ちやくをせいでおこうか——」

「ああ、いかな、かながしらも堪たまるものではない——」

「ええ、苦々しいやつかな——」

「いり海老えびのような顔をして、赤目張あかめばるの——」

「さてさて憎いやつの——」

相当の役者と見える。声が玄関までよく通つて、その間に見物の笑わらいごえ、声が、どツと響

いた。

「さあ、こちらへどうぞ、」

「憚り様。」

階子段は広い。——先へ立つ世話方の、あとに続く一樹、と並んで、私の上りかかる処を、あがり口で世話方が片膝をついて、留まつて、「ほんの仮舞台、諸事不行届きであります。」

挨拶するのに、段を覗込んだ。その頭と、下から出かかった頭が二つ……妙に並んだ形が、早や横正面に舞台の松と、橋がかりの一二三の松が、人波をすかして、揺れるように近々と見えるので……ややその松の中へ、次の番組の茸が土を擡げたよう、余程おかし。……いや、高砂の浦の想われるのに対しては、むしろ、むくむくとした松露であらう。

その景色の上を、追込まれの坊主が、鰭のごとく、キチキチと法衣の袖を煽つて、

「——こちやただ飛魚といたそう——」

「——まだそのつれを言うか——」

「——飛魚しよう、飛魚しよう——」

と揚幕へ宙を飛んだ——さらりと落す、幕の隙すきに、古畳と破障子やれしやうじが頭あられて、消えた。……思え、講釈だと、水戸黄門が竜神の白頭しろがしら、床几しょうぎにかかり、奸賊かんぞく紋太夫を抜打に切つて棄てる場所に……伏屋ふせやの建具の見えたのは、どうやら寂びた貸席か、出来合の倶楽部などを仮に使つた興行らしい。

見た処、大広間、六七十畳、舞台を二十畳ばかりとして、見物は一杯とまではない、が賑にぎやかであつた。

この暑さに、五つ紋の羽織も脱がない、行儀の正しいのもあれば、浴衣で腕まくりをしたのも居る。——裾模様すそもようの貴婦人、ドレスの令嬢も見えたが、近所居まわりの長屋連らしいのも少くない。印半纏しるしはんてんさえも入れごみで、席しきりに劃はなかつたのである。

で、階子はしこの欄干際を縫つて、案内した世話方が、

「あすこが透いております。……どうぞ。」

と云つた。脇正面、橋がかりの松の前に、肩膝を透いて、毛氈もうせんの緋ひが流れる。色紙、短冊でも並びそうな、おさらいや場末の寄席よせ気分とは、さすが品の違つた座をすすめてくれたが、裾模様、背広連が、多くその席を占めて、切髪の後室も二人ばかり、白襟で控えて、金泥きんでい、銀地の舞扇まで開いている。

われら式、……いや、もうここで結構と、すぐその欄干に附着いた板敷へ席を取ると、更紗の座蒲団を、兩人に当てがって、

「涼い事はこの辺が一等でして。」

と世話方は階子を下りた。が、ひどく蒸暑い。

「御免を被つて。」

「さあ、脱ぎましょう。」

と、こくめいに畳んで持った、手拭で汗を拭いた一樹が、羽織を脱いで引くるめた。

……羽織は、まだしも、世の中一般に、頭に被るものと極った麦藁の、安値なのではあるが夏帽子を、居かわり立直る客が蹴散らし、踏挫ぎそうにする……

また幕間で、人の起居は忙しくなるし、あいにく通筋の板敷に席を取ったのだから堪らない。膝の上へのせれば、跨ぐ。敷居に置けば、蹴る、脇へずらせば踏もうとする。

「ちよッ。」

一樹の囁く処によれば、こうした能狂言の客の不作法さは、場所にはよろうが、芝居にも、映画場にも、場末の寄席にも比較しようがないほどで。男も女も、立てば、座つたものを下人と心得る、すなわち頤の下に人間はない気なのだそうである。

中にも、こども服のノーティ少女、モダン仕立ノーティ少年の、跋扈跳梁は夥多しい。……

おなじ少年が、しばらくの間に、一度は膝を跨ぎ、一度は脇腹を小突き、三度目には腰を蹴つけた。目まぐるしく湯呑所へ通ったのである。

一樹が、あの、指を胸につけ、その指で、左の目をおさえたと思うと、

「毬栗は果報ものですよ。」

私を見て苦笑しながら、羽織でくるくると夏帽子を包んで、みしと言わせて、尻にかつて、投膝に組んで掌をそらした。

「がきに踏まれるよりこの方がさばさばします。」

何としても、これは画工さんのせいではない——桶屋、鑄掛屋でもしたろうか？……静かに——それどころか！……震災前には、十六七で、渠は博徒の小僧であつた。

——家、いやその長屋は、妻恋坂下——明神の崖うらの穴路地で、二階に一室の古屋だつたが、物干ばかりが新しく突立つていたという。——

これを聞いて、かねて、知つていたせいであろう。おかしな事には、いま私たちが寄りか凭るばかりにしている、この欄干が、まわりにぐるりと板敷を取つて、階子壇を長方

形の大穴に抜いて、押廻わして、しかも新しく切立っているので、はじめから、たとえば毛利一樹氏、自叙伝中の妻恋坂下の物見に似たように思われてならなかったのである。

「——これはこのあたりのものでござる——」

藍あいなの長なが上がみ下しも、黄の熨のしめ斗め目、小刀をたしなみ、持もち扇おうぎで、舞台で名のつた——脊の低い、肩の四角な、堅くなつたか、癩かんのせいか、首のやや傾かしいだアドである。

「——某それがしが屋敷に、当年はじめて、何とも知れぬくさびらが生えた——ひたもの取つて捨つれども、夜よの間には生え生え、幾たび取つてもまたものごとく生ゆる、かような不思議なことはござらぬ——」

鷺玄庵、シテの出る前に、この話の必要上、一樹——本名、幹次みきじろう郎さんの、その妻恋坂の時分の事を言わねばならぬ。はじめ、別して酔つた時は、幾度も画工えかきさんが話したから、私たちはほとんどその言葉通りといつてもいいほど覚えてゐる。が、名を知られ、売れツこになつてからは、気振けぶりにも出さず、事的一端に触れるのをさえ避けるようになつ

た。苦心談、立志談は、往々にして、その反対の意味の、自己吹聴ふいちようと、陰性の自讃、卑下高慢になるのに氣附いたのである。談中——主なるものは、茸きのこで、渠かれが番組の茸にを遁にげて、比羅びらの、蝟たこのとあのくたらを説いたのでも、ほぼ不断の態度が知れよう。

但し、以下の一齣ひとくさりは、かつて、一樹、幹次郎が話したのを、ほとんどそのままである。

「——その年の残暑の激しさといつてはありませんでした。内中皆裸はだか体です。六畳に三畳、二階が六畳という浅間ですから、開放して皆見えますが、近所が近所だから、そんな事は平気なものです。——色気も娑婆しやば気も沢山な奴等やつらが、たかが暑いくらいで、そんな状ざまをするのでありません。実はまるで衣類がない。——これが寒中だと、とうの昔凍え死んで、こんな口を利くものは、貴方がたの前に消えてしまっていたんでしようね。

男はまだしも、婦おんなもそれです。ご新姐しんぞ——いま時、妙な呼び方で。……主人が医師いしやの出
来損いですから、出来損いでも奥さん。……さしあたってな小博打こぼくちが的あてだったので、
三下さんしたの潜もぐりでも、姉さん。——話のついでですが、裸の中の大男の尻の黄色なのが主人
で、汚れた畚もっこ桶ふんどし 褌ふんどし をしていたのです、褌が畚もっこじや、姉あねごとは行きません。それにした

処で、姉さんとでも云うべき処を、ご新姐——と皆が呼びましたのは。——

万世橋向うの——町の裏店うらだなに、もと洋服のさい取をなや妻して、あざとい碁会所をやつていた——金六、ちやら金という、野幫間のだいこのような元はげのちよいちよい顔を出すのが、ご新姐、ご新姐という、それがつい、口癖くぐせになつたんですが。——膝股ひざももをかくすものを、腰から釣つるしたように、乳を包んだだけで。……あとはただ真白まっしろな……冷い……ののです。冷い、と極きめたのは妙ですけれども、飢えて空腹ひだるくつているんだから、夏でも火気はありますまい。死しにぎわに熱でも出なければ——しかし、若いから、そんなに瘦やせ細こつたほどではありません。中肉で、脚のすらりと、小股こまたのしまつた、瓜うりぎね顔で、鼻筋の通つた、目の大おおきい、無口で、それで、ものいいのきつぱりした、少し言葉尻の上る、声に歯ぎれの嶮けんのある、しかし、気の優しい、私より四つ五つ年上で——ただうつくしいというより仇あだつぱい婦人おんなだつたんです。何しろその体裁ていざいですから、すなおな髪を引詰ひつつめて櫛くし巻まきでいしましたが、生際なまぎはが薄青うすあざいくらい、襟脚えりあしが透通ひなたつて、日南ひなたでは消えそうに、おくれ毛けばかり艶つや々つやとして、涙なみだでしよう、濡ぬれている。悲惨ひつぱんな事には、水ばかり飲のみむものだから、身籠みごもつたようにかえつてふくれて、下腹したはらのゆいめなぞは、乳の下を縊くびつたようでしたよ。

空腹すきはらにこたえがないと、つよく紐ひもをしめますから、男おとこだつて。……

お雪さん——と言いました。その大切な乳をかくす古手拭は、膚はだに合った綺麗好きで、腰のも一所に、ただ洗いただ洗いするんですから、油あぶらでり早はやくの炎熱で、銀粉のようににじむ汗に、ちらちらと紗しやのように靡なびきました。これなら干ぼしになったら、すぐ羽にかわつて欄間を飛ぶだろうと思つたほです。いいえ、天人なぞと、そんな贅ぜいたく沢たくな。裏長屋ですもの、くさばかげろうの幽霊です。

その手拭が、娘時分に、踊のお温習さらいに配つたのが、古行李ふるこうりの底かなにかに残つていたので、あわれですね。

千葉だそうです。千葉の町の大きな料理屋、万翠楼ばんすいろうの姉娘が、今の主人の、その頃医学生だつたのと間違つて。……ただ、それだけではないらしい。学生の癖に、悪く、商売人じみた、はなを引く、賭碁かけごを打つ。それじや退学にならずにいません。佐原の出で、なまじ故郷が近いだけに、外聞かたがた東京へ遁出にげだした。姉娘があとを追つて遁にげげて来て——料理屋の方は、もつとも継母だと聞きました——帰れ、と云うのを、男が離さない。女も情を立てて帰らないから、両方とも、親から勘当になつたんですね、親類義絶——つまるどころ。

一枚、畚ひっば禪の上へ引張ひっぱらせると、脊は高し、幅はあり、風采堂ふうさい々たるものですから、

まやかし病院の代診なぞには持つて来いで、あちこち雇われもしたそうですが、脈を引く前に、顔の真中まんなかを見るのだから、身が持てないで、その目下の始末で……

變に物干ばかり新しい、妻恋坂下へ落ちこぼれたのも、洋服の月賦払げつぷばらいとこおの滞ひっなぞから引かかりの知己ちかづきで。——町の、右の、ちやら金のすすめなり、後見なり、ご新姐あだの仇あだな処をおとりにして、碁会所を看板に、骨牌賭博かるたばくちの小宿こやどという、もくろみだつたらしいのですが、碁盤やぐらの櫓やぐらをあげる前に、長屋の城は落ちました。どの道落ちる城ですが、その没落をはやめたのは、慾よくにあせつて、怪しい企たくらみをしたからなんです。

質の出入れ——この質では、ご新姐の蹴出し……縮ちりめん緬めんのなぞはもう疾とつくない、青地のめりんす、と短刀ひとふり一口。数珠一聯れん。千葉を遁ぬげる時からたしなんだ、いざという時の一二品ふたしなを添そえて、何ですか、三題話のようですが、凄すこいでしょう。……事実なんです。貞操しるしの徴しるしと、女の生命とを預けるんだ。——（何とかじゃ築地へ帰けえられねえ。）——何の事だかわかりませんがね、そういつて番頭おとしを威おどかせ、と言いつかつた通り、私が（一樹、幹次郎、自分をいう。）使つかいに行つたんです。冷汗ひやあせを流して、談判の結果が三分、科学的に数理あらかわで顕あせば、七十と五銭ですよ。

お雪さんの身になつたらどうでしょう。じか肌と、自殺を質に入れたんですから。自殺

を質に入れたのでは、死ぬよりもつらいでしょう。——

——当時、そういった様子でしてね。質の使、箆でお菜漬の買ものなの、……これは酒よりは香が利きます。——はかり炭、粉米のぼら銭買の使いに廻らせる。——わずかの縁すがに縋すがつてころげ込んだ苦学の小僧、（再び、一樹、幹次郎自分をいう。）には、よくは、様子は分らなかつたんですが、——ちやら金の方へ、鴨かもがかかった。——そこで、心得のある、ここの主人あるじをはじめ、いつもころがり込んでいる、なかまが二人、一人は検定試験を十年来落第の中老の才子で、近頃はただ一攫千金の投機を狙ねらっています。一人は、今は小使を志願しても間に合わない、慢性の政治狂と、三さん個を、紳士、旦那、博士に仕立てて、さくら、というものに使つて、鴨はを剥はいで、骨までたたこうという企謀たくらみです。

前々から、ちやら金が、ちよいちよい来ては、昼間の廻燈籠まわりどうろうのように、二階だの、濡縁ぬれえんだの、薄羽織と、兀頭はげあたまをちらちらさして、ひそひそと相談をしていましたつけ。

当日は、小僧に一包み衣類を背負しよわして——損料です。黒緞くろろうの五つ紋に、おなじく鉄無地のべんべらもの、くたぶれた帯などですが、足袋まで身なりが出来ました。そうは資本もとが續かないからと、政治家は、セルの着流しです。そのかわり、この方は山高帽子で——おやおや忘れた——鉄無地の旦那かぶに被せる帽子を。……そこで、小僧のを脱がせて、鳥打

帽です。

——覚えていますが、その時、ちやら金が、ご新姐に、手づくりのお惣菜、餽末そまつなものと重詰とうづがらの豆腐滓、……卯の花うを煎いつたのに、織せんの生姜しょうがで小氣転せうきを利かせ、酢すにした鯉しここいわしわしで氣前きまへを見せたのを一重。——きらずだ、繫つなぐ、見得けんとくがいいぞ、吉左右きつそう！とか言つて、腹はらが空すいているんですから、五つ紋いも、仙台平ひらも、手づかみの、がつがつ喰くい。……

で、それ以来——事件の起りました、とりわけ暑い日になりますまで、ほとんど誰も腹たまに堪たまるものは食たわなかつたのです。——……つもつても知れましようが、講談本にも、探偵ものにも、映画にも、名の出ないほどの悪徒あくとなんですから、その、へままさ加減かへん。一つ穴けらのお虻あしどもが、反対に鴨かにくわれて、でんぐりかえしを打うつたんですね。……夜よになつて、炎天えんてんの鼠ねずみのような、目も口も開あかない、どろどろで帰かへつて来た、三人のさくらの半間はんまさを、ちやら金かねが、いや怒おこるの怒おこらないの。……儲たくわけるどころか、対手方あいてかたに大分おほいの借かりが出来た、さあどうする。……で、損料そんりょう……立たち処どころに損料そんりょうを引剥ひっぱぐ。中にも落第らくだいの投機家とうきかなどは、どぶつで汗ツかき、おまけに脚氣かっけを煩わづつていたんだから、このしみばかりでも痛事いたことですね。その時です、……洗いざらい、お雪ゆきさんの、蹴き出しと、数珠ずしゆと、短刀たんとうの人身御供ひとみごころうは——

まだその上に、無慙むざんなのは、四歳よっつになる男の児こがあつたんですが、口癖に——おなかがすいた——おなかがすいた——と唱歌のように唱うたうんです。

（——かなしいなあ——）

お雪さんは、その、きつぱりした響く声で。……どうかすると、雨が降過ぎても、

（——かなしいなあ——）

と云う一つ癖があつたんです。尻上りに、うら悲しい……やむ事を得ません、得ませんけれども、悪い癖です。心得なければ不可いけませんね。

幼い時間あとしきいて、前後あとしきうろ覚えですが、私の故郷の昔話に、（椿つばきばけ——ばたり。）農

家のひとり子で、生れて口をきくと、（椿つばきばけ——ばたり。）と唾おしの一声ではないけれども、いくら叱つても治らない。弓が上手で、のちにお城に、もののけがあつて、国の守かみが可おそろし恐へんげい変化へんげに悩まされた時、自から進んで出て、奥庭の大椿なえなえに向つていきなり矢つがを番つがえた。（椿つばきばけ——ばたり。）と切つて放すと、枝も葉も萎なえなえ々々となつて、ばたり。で、国のやみあかるが明あかるくなつた——そんな意味だつたと思います。言葉は気をつけなければ不可いけませんね。

食不足で、ひくひく煩っていた男の児が七転八倒します。私は方々の医師へ駆附けた。が、一人も来ません。お雪さんが、抱いたり、擦ったり、半狂乱でいる処へ、右の、ばらりざんと敗北した落武者が這込んで来た始末で……その悲惨さといつたらありません。食あたりだ。医師のお父さんが、診察をしたばかりで、藪だからどうにも出来ない。あくる朝なくなりしました。きらずに煮込んだ剥身は、小指を食切るほどの勢で、私も二つ三つおすそわけに預るし、皆も食べたんですから、看板の鯢のせいです。幾月ぶりかのお魚だから、大人は、坊やに譲ったんです。その癖、出がけには、坊や、晩には玉子だぞ。お土産は電車だ、と云って出たんですのに。――

お雪さんは、歌磨の絵の海女のような姿で、鮑――いや小石を、そつと拾っては、鬼門をよけた雨落の下へ、積み積みしていたんですね。

（――かなしいなあ――）

めそめそ泣くような質ではないので、石も、日も、少しずつ積りました。

――さあ、その残暑の、朝から、早りつけます中へ、端書が来ましてね。――落目もこうなると、めつたに手紙なんぞ覗いた事のないのに、至急、と朱がきのしてあったのを覚えています。ご新姐あてに、千葉から荷が着いている。お届けをしようか、受取りにおい

で下さるか、という両国辺の運送問屋から来たのでした。

品物といえど釘の折でも、屑屋くすやへ売るのに欲ほしい処。……返事を出す端書が買えないんですから、配達をさせるなどは思いもよらず……急いで取りに行く。この使つかいの小僧ですが、二日ばかりというもの、かたまつたものは、漬菜つけなの切れはし、黒豆一粒入っていません。ほんとうのひもじさは、話では言切れない、あなた方の腹がすいたは、都合によつてさせるのです。いいえ、何も喧嘩をするのじゃありません、おわかりにならないと思ひますから、よします。

もつとも、その前日も、金子無心の使に、芝の巴町ともえちよう附近あたり辺まで遣られましたね。出来ツこはありません。勿論、往復とも徒歩てくなんですから、帰途かえりによろよろ目が眩くらんで、ちようど、一つ橋を出ようとした時でした。午砲どん！——あの音で腰を抜いたんです。土を引ひ搔ツかいて起上たがる始末で、人間もこうなると浅間せんげんしい。……行暮れた旅人が灯をたよるようたよとなく便たよる気が出て。——町のちら金の店を覗くと、出窓の処に、忠臣蔵の雪の夜討の炭部屋の立盤たてばんこ子を飾つて、碁盤が二三台。客は居ません。ちら金が、碁盤の前で、何だか古い帳面を繰つておりましたつけ。(や、お入り。)金齒で呼込んで、家内が留守で

蕎麦そばを取る処だ、といつて、一つ食わしてくれました。もり蕎麦は、滝の荒行ほど、どつしりと身にこたえましたが、そのかわり、ご新姐——お雪さんに、（おい、ごく内証ないだぜ。）と云つて、手紙ことづを托たくけたんです。董すみれいろ色の横封筒……いや、どうも、その癖、言う事は古い。（いい加減とぎわごぜんに常盤御前が身のためだ。）とこうです。どの道そんな蕎麦だから、伸び過ぎていて、ひどく中毒あつて、松住町まつずみちよう辺をうなりながら歩くうちに、どこかへ落してしまいました。

——今度は、どこで倒れるだろう。さあ使いに行く。着るものは——
私の田舎の叔母が一枚送つてくれた単衣ひとえを、病人にさせてあるのを剥はぐんです。その臭さというものは。……とにかく妻恋坂下の穴やぐらを出しました。

こんなにしていて、どうなるだろう。櫓やぐらのような物干を見ると、ああ、いつの間にか、そこにも片隅に、小石が積んであるんです。何ですか、明神様の森の空が、雲まで真暗まっくらなようでした。

鰻屋うなぎやの神田川——今にもその頃にも、まるで知ちかづ己きはありませんが、あすこの前を向うへ抜けて、大通りを突切つつきろうとすると、あの黒い雲が、聖堂の森の方へと馳はしると思うと、頭の上にかぶさつて、上野へ旋風つむじかぜを捲まきながら、灰を流すように降つて来ました。ひ

よろひよろの小僧は、叩きつけられたように、向う側の絵草紙屋の軒前へ駆込んだんです。濡れるのを厭いはしません。吹倒されるのが可恐かつたので、柱へつかまつた。

一軒隣に、焼芋屋がありましてね。またこの路地裏の道具屋が、私の、東京ではじめて草鞋を脱いだ場所、泊めてもらつた。しかもその日、晩飯を食わせられる時、道具屋が、めじの刺身をひときれはし一鬩箸で挟んで、鼻のさきへぶらさげて、東京じゃ、これが一皿、じゃない、一鬩、若干金につく。……お前たちの二日分の祭礼の小遣いより高い、と云つて聞かせました。——その時以来、腹のくちい、という味を知らなかつたのです。しかし、ぼんやり突立つては、よくこの店を覗いたものです。——横なぐりに吹込みますから、古風な店で、半分節をおろしました。暗くなる……薄暗い中に、颯と風に煽られて、媚めかしい婦の裙が燃えるのかと思う、あからさまな、真白な大きな腹が、蒼ざめた顔して、宙に倒にぶら下りました。……御存じかも知れませんが、芳年の月百姿の中の、安達ヶ原、縦絵二枚続の孤家で、店さきには遠慮をする筈、別の絵を上被りに伏せ込んで、窓の柱に掛けてあつたのが、暴風雨で帯を引裂いたようにめくれたんですね。ああ、吹込むしぶきに、肩も踵も、わなわな震えている。……

雨はかぶりしましたし、裸のご新姐の身の上を思つて……」

(——語つてここを言う時、その胸を撫でて、目を押える、ことをする。)

「まぶたを溢(あふ)れて、鼻柱をつたう大粒の涙が、唇へ甘く濡れました。甘い涙。——いささか気障(きざ)ですが、うれしい悲しいを通り越した、辛い涙、渋い涙、鉛の涙、男女の思(おも)いせま追(お)つた、そんな味は覚えがない、ひもじい時の、芋の涙、豆の涙、餡(あん)ぱんの涙、金(きん)鏢(つば)の涙。ここで甘い涙と申しますのは。——結膜炎(けつまくえん)だか、のぼせ目(め)だか、何しろ弱(よ)り目に祟(た)り目(め)でしょう。左の目が真紅(まっか)になつて、渋くつて、辛くつて困りました時、お雪(ゆき)さんが、乳を絞つて、つき込んでくれたのです。

(——かなしいなあ——)

走りはしません、ぽたぽたぐらい。——ひとりっこ。一人(ひとり)児(こ)だから、時々飲んでいたんですが、食(が)が少(す)いから涸(か)れがちなんです。私(わたし)を仰(あ)向け(む)にして、横(よこ)合(あ)から胸(むね)をは(は)だけて、……まだ裕(あ)わ(せ)お雪(ゆき)さんの肌(は)には微(か)かに紅(か)の氣(け)のち(ら)つ(い)た、春(はる)の末(すえ)で(し)た。目(め)を(は)ず(す)ま(い)と(す)る(か)ら、弱(よ)腰(こし)を捻(ひね)つて、鬚(まげ)も鬢(びん)もひ(や)り(と)額(かぶ)にか(か)り……白(しろ)い半(はん)身(み)が逆(さか)にな(な)つて見(み)え(ま)し(よ)う。……今(いま)時(とき)……今(いま)時(とき)……そ(そ)ん(な)古(こ)風(かぜ)な、療(りょう)治(ぢ)を、禁(ま)し(め)厭(いと)を、す(す)る(も)の(が)あ(あ)る(か)、と(と)お(お)っ(し)や(や)い(ま)す(か)。ええ、お(お)っ(し)や(や)い。そ(そ)ん(な)事(こと)は、ま(ま)だ(その)頃(ころ)あ(あ)り(ま)し(た)、精(せい)盛(せい)薬(やく)館(かん)、一(い)ち(に)を、掛(か)売(う)で(た)ん(ず)る(だ)け(の)、余(よ)裕(よ)が(あ)つ(て)い(う)事(こと)で(す)。

このありさまは、ちよつと物議になりました。主人あるじの留守で、二階から覗いた投機家が、容易ならぬ沙汰をしたんですが、若い燕つばきだか、小僧の蜂はちまきだか、そんな詮議せんぎは、飯を食ったあとにしようと、徹底した空腹です。

それ以来、涙が甘い。いまそのこぼれるにつけても、さかさに釣られた孤家ひとりつやの女の乳首が目に入って来そううで、従したがつて、ご新姐の身の上みの上に、いつか、おなじ事でもありそううでならなかつた。——予感よかんというものはあるものでしょうか。

その日ひの中に、果うちしておなじような事が起つたんです。——それは受取つた荷物……荷籠かごで、茸きのこです。初茸はつたけです。そのために事が起つたんです。

通り雨どおりあめですから、すぐに、赫かつと、まぶしいほどに日が照ります。甘い涙の飴あめを嘗なめた勢いきおいで、あれから秋葉ヶ原あきばがはらをよろよろと、佐久間町の河岸かし通り、みくら橋、左衛門橋。——とあの辺から両側には仕済しすました店の深い問屋もんやが続きますね。その中に——今思うと船宿せんじやくでしょう。天井に網あみを揃そろえて掛けてあるのが見えました。故郷の市場の雑貨店ざっかてんで、これを扱うものがあつて、私の祖父じいじ——地方いふかの狂言師きやうげんしが食うにこまつて、手内職てうちやくにすいた出来上できあがりがこの網あみを、使つかいで持つて行つたのを思い出して——もう国くにに帰ろうか——また涙が出る。とその涙なみだが甘いのです。餅もちか、団子だんごか、お雪ゆきさんが待つていよう。

(一錢五厘です。端書代が立替えになっておりますが。)

(つい、あの、持って来ません。)

(些細な事ですが、店のきまりはきまりですからな。)

年の少い手代は、そっぽうを向く。小僧は、げらげらと笑っている。

(貸して下さい。)

(お貸し申さないとは申しませんが。)

(このしるしを置いて行きます。貸して下さい。)

私は汗じみた手拭を、懐ふとこ中から——空腹すきはらをしめていたかどうかはお察し下さい——懐中から出すと、手代が一代の逸話として、よい経験を得たように、しかし、汚きたらしそうに撮つまんで拈ひろげました。

(よう!)と反そりかえった掛声をして、

(みどり屋、ゆき。——荷は千葉と。——ああ、万翠楼だ。……医師いしやと遁にげた、この別べつ嬪びんさんの使ですかい、きみは。……ぼくは店用で行って知ってるよ。……果報ものだね、きみは。……可愛がつてくれるだろう。雪白肌の透すき綾あやむすめ娘は、ちよつと浮気ものだというぜ。)

と言やあがつた……

その透綾娘は、手拭の肌襦袢はだしゆばんから透通つた、肩を落して、裏の三畳、濡縁の柱によつ
かかつたのが、その姿ですから、くくりつけられでもしたように見えて、ぬの一重の膝の
上に、小児こどもの絵入雑誌を拵こしらへた、あの赤い絵の具が、腹から血ではないかと、ぞつとした
ほど、さし俯向うつむいて、顔を両手でおさえていました。——やつと小僧が帰つた時です。――

(来たか、荷物は。)

と二階から、力のない、鼻の詰つまつた大おおな声。

(初茸はつこですわ。)

と、きつぱりと、投上げるように、ご新姐ごしんせうが返事をする、

(あああ、銭ぜににはならずか——食おう。)

と、また途方もない声をして、階はしご子段一杯いっぱいに、大おおきな男が、禪ぜんを真ま正しょう面めんに顕あらわれる。
続いて、足早あしはやに刻きざんで下りたのは、政治狂の黒い猿さる股またです。ぎしぎしと音がして、青黄
色に膨れた、投機家とうきけが、豚を一匹、まるで吸つた蛭ひるのように、ずどうんと腰こしで摺すり、欄干
に、よれよれの兵児帯へいこおびをしめつけたのを力綱ちからづなに縋すがつて、ぶら下がるように楯かじを取つて下り

て来る。脚気がむくみ上つて、もう歩けない。

小児のつかつた、おかわを二階に上げてあるんで、そのわきに西瓜の皮が転がって、蒼蠅が集っているのを視た時ほど、情ない思いをした事は余りありません。その二階で、三人、何をしているかというとはなをひくか、あの、泥石の紙の盤で、碁を打っていたんですがね。

欠けた瀬戸火鉢は一つある。けれども、煮ようたつて醬油なんか思いもよらない。焼くのに、炭の粉もないんです。政治狂が便所わきの雨樋の朽ちた奴を……一雨ぐらいじや直ぐ乾く……握り壊して来る間に、お雪さんは、茸に敷いた山草を、あの小石の前へ挿しましたつけ。古新聞で火をつけて、金網をかけました。処で、火気は当るまいが、溢出ようが、皆引掴んで頬張る気だから、二十ばかり初茸を一所に載せた。残らず、薄樺色の笠を逆に、白い軸を立てて、真中ごろのが、じいじい音を立てると、……青い錆が茸の声のように浮いて動く。

(塩はどうした。)

(ごごんせん。)

(魚断、菜断、穀断と、茶断、塩断……こうなりや鯪立ちだ。)

と、主人が、どたりと寝て、両脚を大の字に開くと、

（あああ、待ちたまえ、逆になった方が、いくらか空腹さが凌げるかも知れんぞ。経験じや。）

と政治狂が、柱へ、うんと搦んで、尻を立てた。

（ぼくは、はや、この方が楽で、もう遣つとるが。）

と、水浸しの丸太のような、脚気の足を、襖の破れ棧に、ぶくぶくと掛けている。

（幹もやれよ。）

と主人が、尻で尺蠖虫をして、足をまた突張つて、

（成程、気がかわつていい、茸は焼ける、こつちはやけだ。）

その挙げた足を、どしんと、お雪さんの肩に乗せて、柔かな細頸をしめた時です。

（ああ、ひもじいを逆にすれば、おなが、くちいんだわね。）

と真俯向けに、頬を畳に、足が、空で一つに、ひたりとついて、白鳥が目を眠つたようです。

ハツと思うと、私も、つい、脚を天井に向けました。——その目の前で、

（男は意気地がない、ぐるぐる廻らなくつちやあ。）

名工のひき刀が線を青く刻んだ、小さな雪の菩薩が一体、くるくると二度、三度、六地藏のように廻る……濃い睫毛がチチと瞬いて、耳朶と、咽喉に、薄紅梅の血が潮した。

(初茸と一所に焼けてしまえばいい。)

脚気は喘いで、白い舌を舐めずり、政治狂は、目が黄色に光り、主人はけらけらと笑った。皆逆立ちです。そして、お雪さんの言葉に激まされたように、ぐたぐたと肩腰をゆすつて、逆に、のたうちました。

ひとりでに、頭のとっぺんへ流れる涙の中に、網の初茸が、同じように、むくむくと、笠軸を動かすと、私はその下に、燃える火を思った。

皆、咄嗟の間、ですが、その、廻っている乳が、ふわふわと浮いて、滑らかに白く、一列に並んだように思う……

(心配しないでね。)

と莞爾していった、お雪さんの言が、逆だから、(お遁げ、危い。)と、いうように聞えて、その白い菩薩の列の、一番框へ近いのに——導かれるように、自分の頭と足が摺り出ると、我知らず声を立てて、わつと泣きながら遁出したんです。

路地口の石壇を飛上り、雲の峰が立った空へ、棧橋のような、妻恋坂の土に突立った、

この時ばかり、なぜか超然として——博徒なかまの小僧でない。——ひとり気が昂ると一所に、足をなぐように、腰をついて倒れました。」

天地震動、瓦落ち、石崩れ、壁落つる、血煙の裡に、一樹が我に返った時は、もう屋根の中へ屋根がめり込んだ、目の下に、その物干が挫げた三徳のごとくになって——あの辺も火は疾かった——燃え上つていたそうである。

これ——十二年九月一日の大地震であった。

「それがし、九識の窓の前、妙乗の床のほとりに、瑜伽の法水を湛え——」

時に、舞台においては、シテナにがし。——山の草、朽樹などにこそ、あるべき茸が、人の住う屋敷に、所嫌わず生出づるを忌み悩み、ここに、法力の験なる山伏に、祈禱を頼もうと、橋がかりに向つて呼掛けた。これに応じて、山伏が、まず揚幕の裡にて謡つたのである。が、鷺玄庵と聞いただけでも、思いも寄らない、若く艶のある、しかも取沈めた声であった。

幕——揚る。——

「——三密の月を澄ます所に、案内申さんとは、誰ぞ。」

すらすらと歩を移し、露を払った篠懸や、兜巾の装は、弁慶よりも、判官に、むしろ新中納言が山伏に立出た凄味があつて、且つ色白に美しい。一二の松も影を籠めて、袴は霧に乗るように、三密の声は朗らかに且つ陰々として、月清く、風白し。化鳥の調の冴えがある。

「ああ、婦人だ。……鷺流ですか。」

私がひそかに聞いたのに、

「さあ。」

一言いったきり、一樹が熟と凝視めて、見る見る顔の色がかわるとともに、二度ばかり続け様に、胸を撫でて目をおさえた。

先を急ぐ。……狂言はただあら筋を言おう。舞台には茸の数が十三出る。が、実はこの怪異を祈伏せようと、三山の法力を用い、秘密の印を結んで、いら高の数珠を揉めばむほど、夥多しく一面に生えて、次第に数を増すのである。

茸は立衆、いずれも、見徳、嘯吹、上髭、思い思いの面を被り、括袴、

脚絆きやはん、腰帶こしひも、水衣みずぎぬに包まれ、揃つて、笠を被る。塗笠ぬりかさ、檜笠ひのきがさ、竹子笠たけのこかさ、菅の笠すげのかさ。松茸まつたけ、椎茸しいたけ、とび茸とびたけ、おぼろ編笠おぼろあまがし、名の知れぬ、菌きのこども。笠の形を、見物は、心のままに擬なぞらえ候え。

「——あれあれ、」

女山伏の、優しい声して、

「思いなしか、茸の軸に、目、鼻、手、足のようなものが見ゆる。」

と言う。詞ことばにつれて、如法の茸どもの、目を剥むき、舌を吐あいて嘲あざけるのが、憎く毒々しいまで、山伏は凜りんとした中うちにもかよわく見えた。

いくち、しめじ、合羽かっぱ、坊主ぼうしゅ、熊茸くまたけ、猪茸ししたけ、猪茸ししたけ、虚無僧茸こむそうたけ、のんべろ茸、生える、殖ふえる。蒸上り、抽ぬき出いでる。……地蔵が化けて月のむら雨に托鉢たくはつをめさるるごとく、影籠おぼろに、のほのほと並んだ時は、陰気が、緋ひの毛氈もうせんの座を圧して、金銀のひらめく扇子おうぎの、秋草の、露も砂子も暗くかった。

女性の山伏は、いやが上に美しい。

ああ、窓に稲妻がさす。胸がとどろく。

たちまち、この時、鬼頭巾に武悪の面して、極めて毒悪にして、邪相なる大茸が、傘を

半開きに翳し、みしと面をかくして頭われた。しばらくして、この傘を大開きに開く、鼻を嘔き、息吹きを放ち、毒を嘔いて、「取て嘔もう、取て嘔もう。」と躍りかかる。取着き引着き、十三の茸は、アドを、なやまし、黴り黴り、山伏もともに追込むのが定であるのに。――

「あれへ、毒々しい半びらきの菌が出た、あれが開いたらばさぞ夥多しい事であろう。」
山伏の言につれ、件の毒茸が、二の松を押す時である。

幕の裾から、ひよろりと出たものがある。切禿で、白い袖を着た、色白の、丸顔の、あれは、いくつぐらいだろう、這うのだから二つ三つと思う弱々しい女の子で、かさかさと衣ものの膝ずれがする。菌の領した山家である。舞台は、山伏の気が籠つて、寂としてゐる。ト、今まで、誰一人ほとんど登音を立てなかつた処へ、屋根は熱し、天井は蒸して、吹込む風もないのに、かさかさと聞こえるので、九十九折の山路へ、一人、篠、熊笹を分けて、嬰子の這出したほど、思いも掛けねば無気味である。

ああ、山伏を見て、口で、ニヤリと笑う。
悚然とした。

「鷺流？」

「這う子は早い。谿河の水に枕なぞ流るるように、ちよろちよると出て、山伏の裙に絡
わると、あたかも毒茸が傘の轆轤を弾いて、驚破す、取て嚙もう、とあるべき処を、――
「焼き食おう！」

と、山伏の、いうと斉しく、手のしないで、数珠を振って、ぴしりと打って、不意に魂
消て、傘なりに、毒茸は膝をついた。

返す手で、

「焼きくおう。焼きくおう。」

鼻筋鋭く、頬は白澄む、黒髪は兜巾に乱れて、生競った茸の、のほのほと並んだのに、
打振うその数珠は、空に赤棟蛇の飛ぶがごとく閃いた。が、いきなり居すくまった茸
の一つを、山伏は諸手に掛けて、すとなと、笠を下に、逆に立てた。二つ、三つ、四つ。

多くは子方だったらしい。恐れて、魅せられたのであろう。

長上下は、脇座にとぼんとして、ただ首の横ぎまに傾きまさるのみである。

「一樹さん。」

真蒼になって、身体からだのぶるぶると震う一樹の袖を取った、私の手を、その帷子かたびらが、

落葉、いや、茸のような触感で衝いた。

あの世話方の顔と重かさなつて、五六人、揚幕から。切戸口にも、楽屋の頭かしらのぞが覗いたが、ただ目鼻のある茸になつて、いかんともなし得ない。その二三秒時よ。稲妻の瞬く間よ。

見物席の少年が二三人、足袋を空そらに、逆さかになると、膝までの裙すそを蹴かして仰向あおむけにされた少女がある。マツシユルムの類であろう。大人は、立構えをし、遁身にげみになつて、声を詰めた。

私も立とうとした。あの舞台の下は火になりはしないか。地震、と欄干につかまつて、目を返す、森を隔てて、煉瓦れんがの建たてもの、教会らしい尖せん塔とうの雲端に、稲妻が蛇のように縦にはしる。

静寂、深山に似たる時、這う子が火のつくように、山伏の裙すそを取つて泣出した。

トウン——と、足拍子を踏むと、膝を敷き、落した肩を左から片かた膚はだ脱いだ、淡紅の薄い肌はだ襦じゆ袢ばんに膚が透く。眉をひらき、瞳を澄まして、向直つて、

「幹次郎さん。」

「覚悟があります。」

つれに対すると、客に会釈と、一度に、左右へ言ことばを切つて、一樹、幹次郎は、すつと出

て、一尺ばかり舞台の端に、女の褌つまに片膝を乗掛けた。そうして、一度押おしい戴ただくがごとくにして、ハタと両手をついた。

「かなしいな。……あれから、今もひもじいわ。」

寂しく微笑ほほえむと、搔かいはだけで、雪なす胸に、ほとんど玲瓏れいろうたる乳が玉を欺あざむく。

「御覧なさい——不義の子の罰で、五つになっても足腰が立ちません。」

「うむ、起たて。……お起ち、私が起たせる。」

と、かつきと、腕にその泣く子を取つて、一樹が腰を引立てたのを、添抱そえたきに胸へ抱いた。

「この豆腐娘。」

と嘲あざけりながら、さもいとしさに堪えざるごとく言う下に、

「若いお父さんに骨をお貰い。母さんが血をあげる。」

俯向うつむいて、我と我が口にその乳首を含むと、ぎんと白妙しろたえの生命いのちを絞った。ことごと、

ひちやひちや、骨なし子の血を吸う音が、舞台から響いた。が、子の口と、母の胸は、見る見る紅玉の柘榴ざくろがこぼれた。

颯さつと色が薄く澄むと——横に倒れよう——とする、反らした指に——茸は残らず這込ん

で消えた——塗笠を拾ったが、

「お客さん——これは人間ではありません。——紅茸べにたけです。」

といつて、顔をかくして、倒れた。顔はかくれて、両手は十ウの爪つまべに紅は、世に散るまんじの白い瘰癧けいれんを起した、お雪は乳首を嚙切かみきつたのである。

おとし
一 昨年おとしの事である。この子は、母の乳が、肉と血を与えた。いま一樹の手に、ふつくりと、且つ健かに育っている。

不思議に、一人だけ生命いのちを助かった女が、震災の、あの劫火ごうかに追われ追われ、縁あつて、玄庵げんあんというのに助けられた。その妾めかけであるか、娘分であるかはどうでもいい。老人だから、楽屋で急病が起つて、踊の手練てだれが、見真似の舞台を勤めたというので、よくおわかりになろうと思う。何、何、なぜ、それほどの容色きりようで、酒場へ出なかつた。とおっしゃるか？ それは困る、どうも弱つたな。一樹でも分るまい。なくなつた、みどり屋のお雪さんに……お聞き下さい。

昭和五（一九三〇）年九月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成8」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年5月23日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集」岩波書店

1942（昭和17）年7月刊行開始

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5:86）を、「秋葉ケ原」は小振りに、「安達《あだち》ケ原」「日《ひ》ケ窪」は大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：林 幸雄

2001年9月17日公開

2005年9月26日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

木の子説法

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>